

PROGRAM NOTE

2017

近藤譲：間奏曲

ピアノ独奏のための

Interlude

for solo Piano

井上郷子さんからの委嘱によって書かれた作品。この作品は、基本的には、私のこれまでの作曲と同様に、一本の旋律線（或いは、一筋の時間の流れ）から成り立っている。だがその「線」は、広い音域への散開や、強弱の対比などによって、言わば、引き裂かれている。

どれほど一元的に形成されたものであっても、一度それが形のある全体として姿を現せば、そこには、互いに対比的に区別される諸部分が認識される。というのも、「形のある全体」には必ず内部構造があり、そしてそこでの構造とは、区分された諸部分間の相互関係性に外ならないからである。逆に言えば、内部に対比的な諸部分を含まないような全体といったものは無い。この《間奏曲》の基礎となっている「一本の旋律線」が、諸種の対比によって引き裂かれているように見えるのは、最近の私が、そうした不可避的な構造の対照性をことさらに強く意識するようになったからだろう。

また、この曲の後半には、最近の私の声楽曲に時折みられるような、非常に複雑な対位法的書法による部分が現れる。私にとってのこうした対位法は、複数の声部の組み合わせであるよりも、むしろ、一本の線（一筋の時間）が離開した形である。つまり、こうした対位法も、一本の線のように単一に見える全体の中に存在する（少なくとも、存在し得る）複雑な対比的構造を啓き示す試みのひとつである。

私は屢々、曲を書いているときに偶々読んでいた本の題名やその中の文章を、その曲のタイトルにすることがある。そして、《間奏曲》の作曲中には、イエイツの詩「ベン・バルベンの下で」Under Ben Bulden を読んでいて、その中の「Between his two eternities」（「二つの永遠の間であって」）という一行がとても心にひっかかった。私の音楽作品には、始まりがあり、終わりがあって、一応それ自体で纏まりをもっているのだが、とはいえそれは、完全に自律的・自立的な存在ではない。つまり、私の曲は、その始まりの前の「過去」という時間と、その終わりの後の「未来」という時間に、切り離し難く繋がっている（連続している）。私はいつも、そう感じている。つまり、私の曲は、過去と未来という二つの永遠の間にあるもの、即ち、「間奏曲」なのである。

PROGRAM NOTE

尤もこれは、私がイエイツの詩の一行から自由勝手に連想の翼を広げた結果であって、もとの詩の意味するところとはほとんど無関係である。なにしろ、イエイツの詩におけるこの行の文脈は、「Many times man lives and dies / Between his two eternities. / That of race and that of soul.」（「人は二つの永遠の間であって、何度も生き、何度も死ぬ。種族の永遠と魂の永遠の間で。」）となっているのだから。

近藤 譲

初演：2017年3月(東京)

初演者：井上郷子(ピアノ)

委嘱：井上郷子

出版：University of York Music Press (UK)

演奏時間：7分30秒